

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730644

研究課題名(和文) 侵入思考に対する自我異和的評価を支える条件の解明

研究課題名(英文) The factors behind egodystonic appraisal for intrusive thoughts

研究代表者

荒木 剛 (Araki, Tsuyoshi)

東北大学・加齢医学研究所・助教

研究者番号：20510556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)： 侵入思考が悪化していく原因として、思考抑制の関与が強く疑われている(Clark, 2005)。思考抑制につながりやすい認知評価次元として「自我異和性」がある(荒木ら, 2010)が、認知バイアス等との関連性を含め、生じやすい条件についてはほとんど明らかとなっていない。

質問紙調査により侵入思考との関連が指摘されている認知バイアスであるTAF(思考と行為の混同)との関連を検討したところ、TAFと自我異和的評価が複合して思考抑制を導くのではなく、自我異和的評価が単独で思考抑制を導くことが確認できた。

研究成果の概要(英文)： Thought suppression is one of factors that exacerbates intrusion of unwanted thoughts into one's mind. Egodystonic appraisal to intrusive thoughts may cause thought suppression, however, it is unclear that whether egodystonic appraisal has a relationship with cognitive bias (e.g. thought-action fusion) or any other conditions.

We investigated the relationship between egodystonic appraisal and thought-action fusion through a questionnaire survey. Results indicated that egodystonic appraisal induce thought suppression directly regardless of thought-action fusion.

研究分野：健康心理学

キーワード：侵入思考 自我異和性 思考抑制 認知評価

1. 研究開始当初の背景

様々な精神障害における中核となる症状に、侵入思考 (intrusive thoughts) がある (Clark, 2005)。妄想、自動思考、強迫観念、心配など、これらは本人の意志とは無関係に意識の中に繰り返し侵入して通常の認知的活動を著しく妨害し、不安や恐怖などの否定的感情を強く喚起する。

侵入思考そのものは健常者群にも日常的に発生する現象であり (Freeston et al., 1991)、犯罪、事故、失敗や汚染などをテーマとした侵入思考を臨床群と同様に体験している。しかし、体験頻度においては大きな相違があり、臨床群の体験率の高さに比して、健常者群の体験率は非常に低い (Purdon & Clark, 1994)。また、健常者群よりも臨床群の方が侵入思考を不快で制御困難であると認知評価しており、「思考抑制」に代表されるように、積極的な対処を試みる傾向がある (Ladouceur et al., 2000)。思考抑制は不快な侵入思考を意識しないようにする方略であるが、抑制の後にむしろ侵入思考の頻度は増加する傾向があり、思考のリバウンド現象として広く知られている。侵入思考が何度も繰り返し発生すること、さらには深刻な精神病理へと発展していく理由として、思考抑制とその後のリバウンド現象の関与が強く指摘されている (Clark, 2005)。

これに関連して、侵入思考に対する自我異和的 (egodystonic) な認知評価がある。これは強迫性障害や統合失調症において典型的とされる認知評価であり、侵入思考の内容が自らの道徳観や価値観、目標や好みなどと相容れない異質なものであるという評価を指す (Purdon, 2005)。しかし、侵入思考に対する自我異和性の評価と精神症状の関係については、自我異和性を測定する手段がなかったこともあって実証的な研究がほとんど行なわれていなかった。この問題を解決するべく、Purdon et al. (2007) は自我異和性を測定する尺度 (Ego-Dystonicity Questionnaire: EDQ) を開発している。この尺度は「道徳観との不一致」、「心理的抵抗感」、「自己理解への影響」、「不合理感」の下位尺度を有しており、強迫性障害の臨床群の方が健常者群に比して高い得点を示していた。このように、臨床群の侵入思考は極めて自我異和的と評価されており、侵入思考の自我異和性を高く評価するほど、強い不快感が生じて思考抑制への動機付けが高まると予想できる。

申請者は、EDQ の日本語版の作成を試み、侵入思考に対する自我異和的評価と対処方略および適応状態の関係について縦断的調査を実施した (荒木ら, 2010)。調査は約 1 カ月の間隔を空けて 2 回実施され、初回の調査では自我異和的な認知評価と対処方略が、2 回目の調査で OCD 症状と抑うつ症状が測定された。分析の結果、自我異和的な認知評価

の中でも、特に「思考の統制困難 / 被操作感」および「道徳観との不一致」が思考抑制 (「罰」) に結び付きやすく、1 カ月後の侵入思考の発生頻度の増加や OCD 症状および抑うつ症状の悪化を導くことが示された。これは自我異和的評価が思考抑制とリバウンド現象を通じて OCD 症状や抑うつ感を高めていくことを初めて実証した研究であり、介入のターゲットとして自我異和的評価に着目することの有益性を強く示唆するものと言える。

侵入思考に対する自我異和的評価についての実証的研究は始まったばかりだが、以下のような要因が自我異和的評価に影響すると考えられる。**1. パーソナリティ**: 自我異和的評価は、神経症傾向と正の相関を、開放性とは負の相関を示す (荒木ら, 2009)。**2. 認知バイアス**: 様々な精神障害において観察される認知の歪みの 1 つに、“思考と行為の混同” (thought-action fusion: TAF) がある。TAF は「思考は自身の性格の不道徳さを暗示する / 思考は破滅的な出来事の発生を高める」という信念であり (Berle & Starcevic, 2005)、TAF 傾向の高い者は、侵入思考によって自己概念や現実認識 (リアリティモニタリング) に混乱を来たしやすく、侵入思考に対して自我異和的評価を行ないやすいと予想される。**3. 思考の制御困難性**: リバウンド現象によって何度も同じ思考が繰り返し発生する場合、その内容よりも“思考が制御できない”ことに対して強い自我異和感が生じる可能性がある。**4. 思考の新奇性 / 既知性**: OCD 患者は健常者よりも侵入思考の自我異和性を高く評価するが、その程度は症状の強さと負の相関を示す (Purdon et al., 2007)。その理由は不明だが、馴化が生じる、自己像を修正することにより思考の自我異和性が低減するなどの可能性が指摘されている (Clark, 2005)。

2. 研究の目的

このような現状を踏まえ、本研究計画は主に以下の 2 点について多角的に検討するものである。

自我異和的評価と認知バイアス等との関係

TAF に代表されるような認知バイアスおよび認知評価に影響するその他の個人内要因との関係について検討を加える。

思考の制御困難性・新奇性 / 既知性と自我異和的評価の関係

抑制により生じる侵入思考の増加 (リバウンド現象) や自我異和的評価の程度が時間経過に伴ってどのように変化していくか検討する。

3. 研究の方法

自我異和的評価と認知バイアス等との関係

【調査対象者と手続き】

大学生 129 名 (男性 77 名、女性 52 名、平均年齢 18.98 歳 ($SD=0.69$)) に協力を依頼し、質問紙調査を実施した。

【質問紙の構成】

(a) 侵入思考に関する質問

侵入思考の定義についての説明文を読んだ後に最近体験した侵入思考を 1 つ記述してもらい、その体験頻度について 4 段階で評定を求めた。

(b) Ego-Dystonicity Questionnaire (EDQ) (Purdon et al., 2007; 荒木他, 2013)

自我異和的評価の程度を測定する尺度。日本語版は「困惑・不合理感」「自己理解の混乱」「道徳観への脅威」「思考の拒絶」の 4 下位尺度 20 項目から構成されている。

(c) Thought Control Questionnaire (TCQ) (Wells & Davies, 1994; 山田・辻, 2007)

侵入思考に対するコーピングを測定する尺度。思考抑制を反映する「罰」の下位尺度のみを用いた。

(d) Thought-Action Fusion Scale (TAFS) (Shafran et al., 1996; 鈴木・代田, 2004)

TAF を測定する尺度。日本語版は「道徳」「他人」「自分」の下位尺度を有している。

思考の制御困難性・新奇性 / 既知性と自我異和的評価の関係

実験 A

【要因計画】刺激語 (不快 / 中性) × 抑制 (有 / 無 (統制群)) = 4 条件 × 15 名

【従属測定】EDQ 日本語版、思考のリバウンド回数および苦痛度・制御困難感に関する項目。

【仮説】侵入思考の制御困難性が高いほど、自我異和的な認知評価が行われる。

【手続き】大学生が体験しやすい不快な出来事 (「失恋」など) に関するシナリオを渡し、その主人公になったつもりで読むように教示する。その上で、不快条件ではシナリオ内容に関連する複数の不快な刺激語 (「裏切り」など) を、中性条件では中性的な刺激語 (「入学」など) を呈示し、それらの意味と使用例文を記述してもらい。その後、3 分間の抑制ピリオドを設ける。抑制中は先ほど記述した刺激語の意味と例文について一切考えないようにと教示し、考えてしまった場合はその回数を記録してもらい (抑制条件)。統制群には抑制を求める教示は行なわないが、同様にリバウンドした回数を記録してもらい。抑制ピリオド終了後、EDQ および侵入思考の苦痛度・制御困難感に関する項目に回答を求めた。

【分析の方針】操作チェックとして思考のリ

バウンド回数・制御困難感・苦痛度を各条件間で比較し、不快・抑制群が最も苦痛かつ制御困難で、思考のリバウンド回数も多いことを確認する。その後、EDQ の得点を各条件間で比較する。

実験 B

【要因計画】(刺激語 (新規呈示 / 反復呈示) × 抑制 (有 / 無) = 4 条件 × 15 名) × 試行 (初回 / 3 週間後 / 2 カ月後)

【従属測定】EDQ 日本語版、思考のリバウンド回数および苦痛度。

【仮説】侵入思考の既知性が高い (新奇性が低い) ほど、自我異和的とは評価されなくなっていく。

【手続き】制御困難性に関する実験と同様の手続きを用いるが、刺激語はシナリオ内容に関連した不快語のみとする。実験は 3 回に渡って実施され、新規呈示条件では毎回新しい単語が、反復呈示条件では毎回同じ単語が呈示される。

【分析の方針】各条件間で EDQ 得点を比較する。

4. 研究成果

自我異和的評価と認知バイアス等との関係

思考抑制に対する TAF と自我異和的評価の影響を検討するため、「罰」を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。まず第 1 ステップとして侵入思考の体験頻度を、第 2 ステップで TAFS の 3 つの下位尺度を、第 3 ステップで EDQ の 4 つの下位尺度を、第 4 ステップで TAFS × EDQ の 2 次の交互作用項を、第 5 ステップで、侵入思考の体験頻度 × TAFS × EDQ の 3 次の交互作用項を投入した。その結果、第 2 ステップ及び第 3 ステップにおける R^2 の変化量が有意となり (第 2 ステップ: $R^2=.138(p<.001)$ 、 $R^2=.161(p<.001)$; 第 3 ステップ: $R^2=.401(p<.001)$ 、 $R^2=.274(p<.001)$)、第 2 ステップでは「自分」が、第 3 ステップでは「困惑・不合理感」「自己理解の混乱」「道徳観への脅威」が有意な β を示していた。

交互作用項を投入しても説明力があまり上がらないことから、TAF と自我異和的評価が複合して思考抑制を導くのではなく、自我異和的評価が単独で思考抑制を導くことが確認できた。本研究の知見は、介入のターゲットとして TAF 等の認知バイアスよりも自我異和的評価に焦点化することの有望さを示すものと言えるだろう。

思考の制御困難性・新奇性 / 既知性と自我異和的評価の関係

実験の結果、いずれも有意な値が得られなかった。理由としては、実験操作がうまく行

かななかったことが考えられる。実験 A および B において侵入思考を喚起するためのシナリオによる操作が機能せず、侵入思考がほとんど発生しなかった。また、刺激語やシナリオの内容を変更する等の工夫を行っても結果はほとんど変わらなかった。日本心理学会や日本パーソナリティ心理学会等に参加して侵入思考に関する研究を行っている研究者と何度か情報交換を行ったが、他の研究者も実験操作に苦慮している様子が見受けられた。実験室実験により侵入思考を喚起することの困難さと問題点があらためて浮き彫りとなり、今後の研究に向けた更なる工夫が必要と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

荒木剛・佐藤拓・菊地史倫・池田和浩. 自我異和性尺度日本語版(EDQ-J)作成の試み. 精神医学, 印刷中.(査読あり)

〔学会発表〕(計 1 件)

荒木剛・佐藤拓・菊地史倫・池田和浩. 侵入思考に対する自我異和的評価と思考抑制の関係 - 「思考と行為の混同」の影響について -. 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会, 2013 年 10 月 12 日, 江戸川大学(千葉県流山市).

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

荒木 剛 (ARAKI TSUYOSHI)
東北大学・文学研究科・助教
研究者番号：20510556

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：